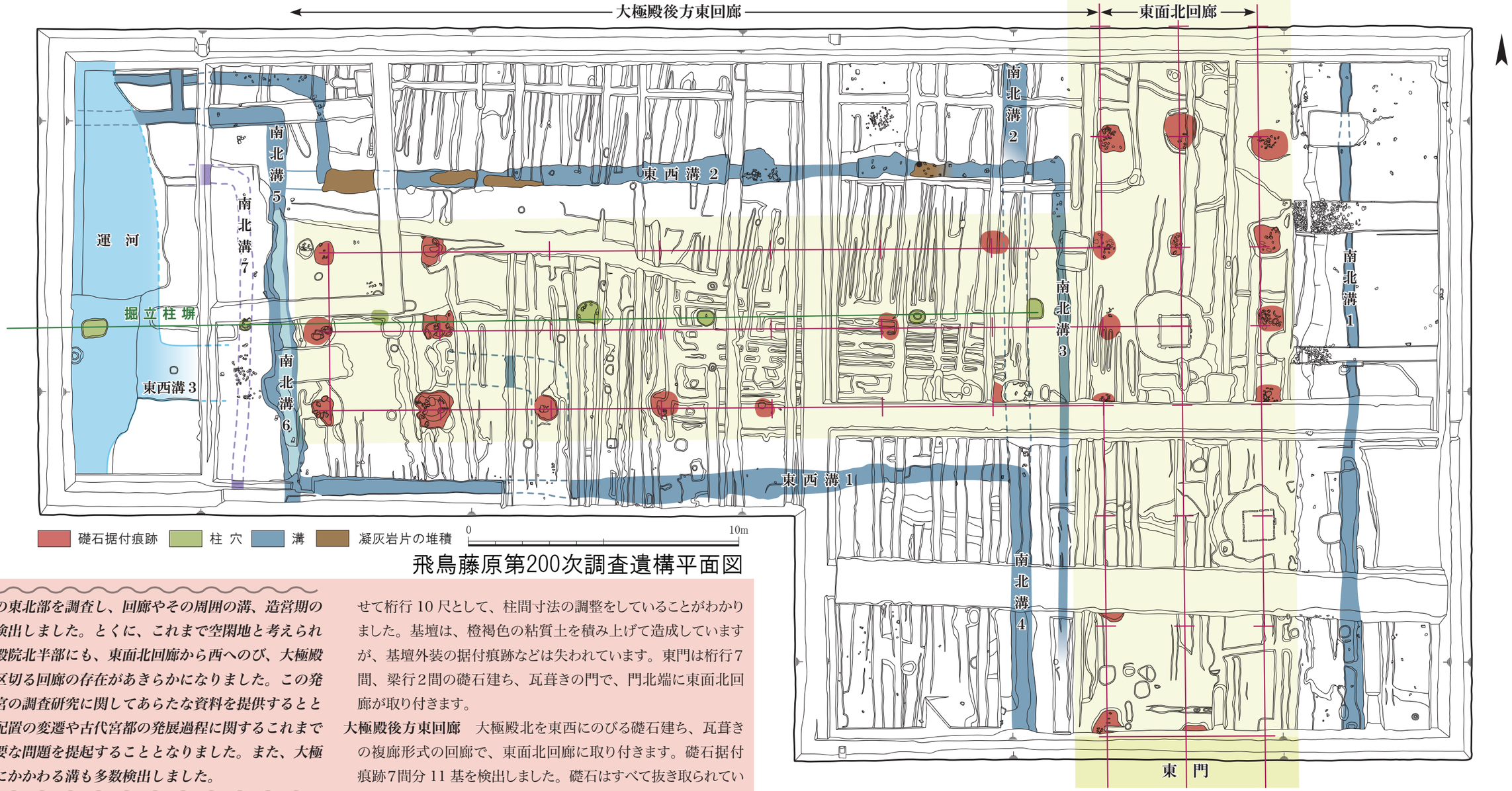


飛鳥藤原第200次調査遺構平面図

大極殿院の東北部を調査し、回廊やその周囲の溝、造営期の運河などを検出しました。とくに、これまで空閑地と考えられていた大極殿院北半部にも、東面北回廊から西へのび、大極殿院を南北に区切る回廊の存在があきらかになりました。この発見は、藤原宮の調査研究に関してあらたな資料を提供するとともに、宮殿配置の変遷や古代宮都の発展過程に関するこれまでの議論に重要な問題を提起することとなりました。また、大極殿院の造営にかかわる溝も多数検出しました。

藤原宮は694年から710年まで営まれた宮殿です。その中心部に位置する大極殿院は、回廊で囲まれた東西約120 m、南北約165 mの空間で、内庭は礫敷きの広場となります。

大極殿院の調査は戦前の日本古文化研究所の調査（1934・1935年）に始まり、戦後は奈良文化財研究所が継続的に進めてきました。その結果、大極殿院回廊は礎石建ち瓦葺きの複廊で、四方に門が開くことが判明しています。また、藤原宮造営の資材などの搬入を目的として掘られた運河や、そこから派生する溝など、造営時の様相もあきらかとなっています。今回は大極殿東北部の東面北回廊、および内庭の発掘調査をおこないました。

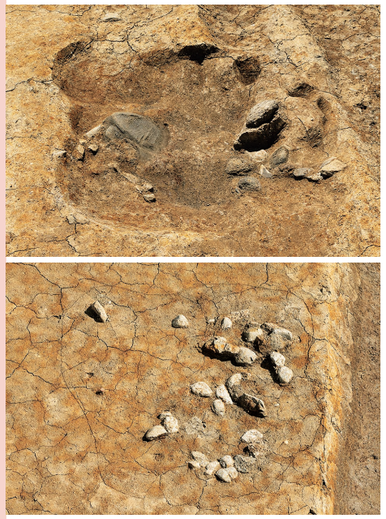
東面北回廊・東門　礎石建ち、瓦葺きの複廊形式の回廊で、礎石据付痕跡7間分10基を検出しました。礎石はすべて抜き取られていますが、据付穴と根石が残存します。柱間寸法は、桁行約4.1 m (14尺)、梁行約2.9 m (10尺) ですが、大極殿後方東回廊との取付部2間のみを大極殿後方東回廊の梁行に合わせて桁行10尺として、柱間寸法の調整をしていることがわかりました。基壇は、橙褐色の粘質土を積み上げて造成していますが、基壇外装の据付痕跡などは失われています。東門は桁行7間、梁行2間の礎石建ち、瓦葺きの門で、門北端に東面北回廊が取り付きます。

大極殿後方東回廊　大極殿北を東西にのびる礎石建ち、瓦葺きの複廊形式の回廊で、東面北回廊に取り付きます。礎石据付痕跡7間分11基を検出しました。礎石はすべて抜き取られていますが、据付穴と根石が残存します。柱間寸法は、桁行約4.1 m (14尺)、梁行約2.9 m (10尺) です。基壇は大部分が削られており、基壇外装の据付痕跡なども失われています。大極殿院北半部の空間を、南北に区切るものと考えられます。

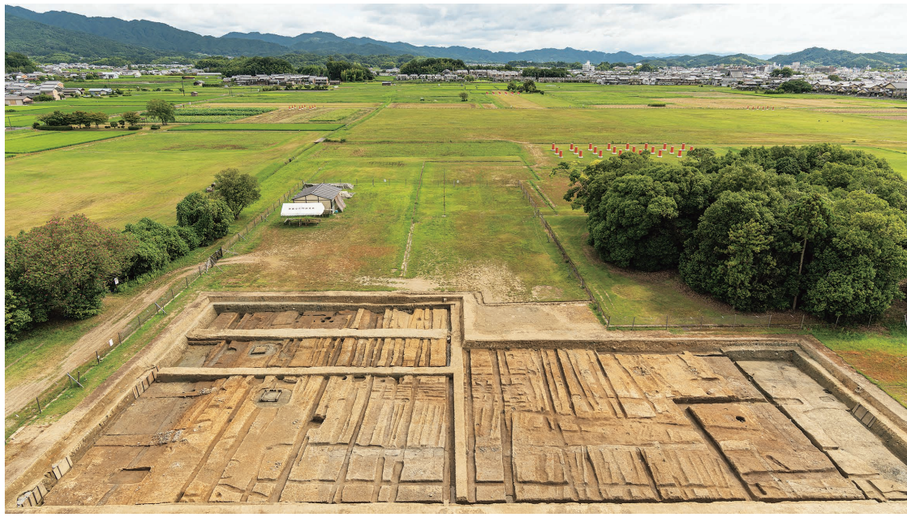
掘立柱塀　大極殿北を東西にのびる柱列で、7基を検出しました。以前の調査で確認した塀の東延長部分にあたるとみられます。大極殿後方東回廊と同様、大極殿院北半部を南北に区切るものと考えられます。

運河に取り付く溝　東西溝3を検出しました。運河から東にのび、南から続く運河から派生した溝に連なると考えられます。

回廊基壇裾の溝　南北溝1～7、東西溝1・2があり、運河や東西溝3を埋め立てた後に掘られています。南北溝1・2は東面北回廊に伴う溝で、南北溝3・4や東西溝1・2は大極殿後方東回廊の造成時に掘られた溝です。これらは造営時の区画溝や、基壇造成後の排水溝で、大極殿院の造営計画や、造営の手順を復元する手がかりとなります。



礎石据付痕跡検出状況
※大極殿後方東回廊（上）と東面北回廊（下）



調査区全景（北から）
※大極殿院東北部が今回の調査対象地

藤原宮
大極殿院の調査

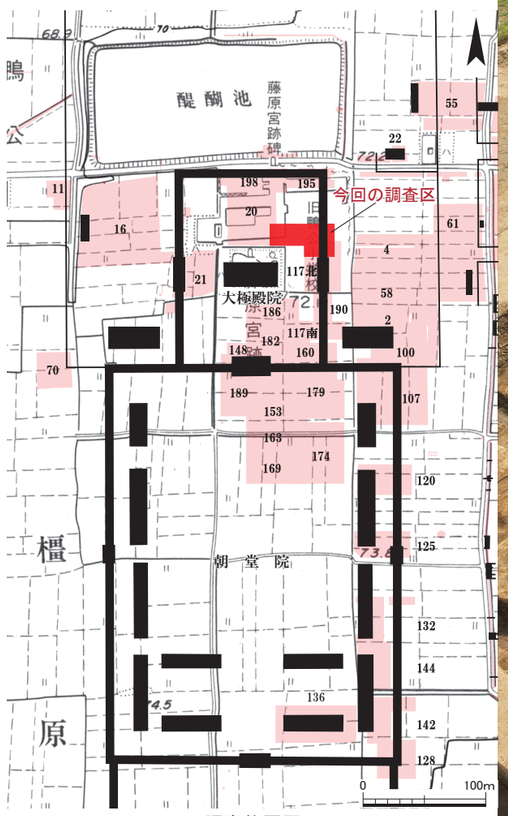
飛鳥藤原第 200 次調査　現地説明会資料

（独）国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部

大極殿後方東回廊西端部の遺構検出状況（北から）
※礎石据付痕跡が南北に並び、回廊基壇裾に沿ってのびる複数の溝がＬ字に屈曲する

東面北回廊（手前）と大極殿後方東回廊（東から）
※大極殿後方東回廊が取り付く２間分（写真中央）は柱間寸法を狭くする

東面北回廊基壇周りの瓦出土状況（北から）
※宮廃絶後に廃棄された瓦が厚く堆積していた



調査位置図
※調査地は大極殿院東面北回廊と内庭部にあたる

大極殿後方東回廊から大極殿、畝傍山を望む
（北東から）
2019 年 8 月 6 日撮影

藤原宮 大極殿院の調査
（飛鳥藤原第 200 次調査現地説明会資料）
2019.10.6

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部
〒 634-0025 奈良県橿原市木之本町 94-1　https://www.nabunken.go.jp
Edited by Y.Matsunaga·M.Kuriyama